

使徒の使命 / 教会の使命

初代教会は聖霊のダイナミックな力に満たされた使徒たちの指導の下に急速に成長していったが、成長するにつれてその内部に諸種の問題も生じ始めた。エルサレム教会には貧しい人々、特にやもめたちが多かった。また会衆は、ヘブライ語を話す本国のユダヤ人と、ヘレニストと呼ばれるギリシャ語を話す外地帰りのユダヤ人とから成っていた。その言葉と文化の違いは両者の間に少なからぬ問題を引き起こした。

すでに学んだように生まれたばかりのエルサレム教会では、裕福な信徒たちがその財をささげて出来た共有資金の中から、日々の生活扶助が貧しい信徒たちに対して行なわれていたが、そのうち、ギリシャ語を話すユダヤ人たちから、ヘブライ語を話すユダヤ人たちに対して、自分たちのやもめらが、日々の配給で軽んじられているという苦情が出たのである。

私は聖書の「正直さ」にいつも驚く。聖書の記者たちは、教会内に起った良いことばかりではなく悪いことも、都合の悪いことも都合の悪いことも、つつみ隠さず正直に記す。5章のアナニヤとサフィラ事件がそうであり、この6章の配給問題もそうである。ここに聖書が信頼に値する点がある。

人間のからだは完全でなく、時には風邪を引き、時には熱を出し、いろいろ病気に悩むように、教会もすんなりと成長せず、弱さの中で時には過ちを犯し、時には罪に陥ることもある。これが、この地上にある教会の現実(リアリティ)であることを初代教会は隠すことなく私たちに教えるのである。

従って問題は、いろいろな出来事が起こることではなく、そのような出来事の中で教会がどのようにそれに対処していくかということが問題なのである。使徒たちは日々の配給問題に直面し、冷静沈着に、しかも具体的に、み言葉に従って行動した。彼らは会衆を召集し、この「日々の分配」の仕事の責任を担うべき人々を選ぶようにうながした。

この賢明な提案は会衆一同の賛成するところとなり、彼らはステファノを中心とする「聖と知恵に満ちた評判の良い人々」を7人選び、使徒たちの前に立たせた。そして使徒たちは彼らのために祈り、慈善救済の任にあたせたのである。「こうして神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていった」(6:7)。

使徒たちの提案の言葉(6:2-4)は、もう一つ大切なことを私たちに教える。すなわち教会における牧師(教師)の第1とすべき使命は何かということ、即ち牧師の第1の使命は何をさておいても神の言葉を決してないがしろにせず「祈りとみ言葉の奉仕」(すなわち礼拝と福音の宣教)に集中することである。牧師が何でもしなければならず、従って多忙のあまり、必要な時間とエネルギーを本来の務めにさくことができないというのが明治以来の日本の教会の牧師の事情であった。この傾向は今でも見られる。

牧師は自分に与えられた本来の務めが何であるかをよくわきまえて、そのことにまず熱心に励むべきであり、また教会に連なる信徒は牧師の職務の重大さを正しく理解し、牧師が何をさておいても「祈りとみ言葉の奉仕」に集中専心できるように配慮する。そして牧師とともに福音の拡大と教会の前進のために、喜んで時間と賜物をささげて共に主と主の教会に仕えていく。初代教会からそのことを教えられるのである。